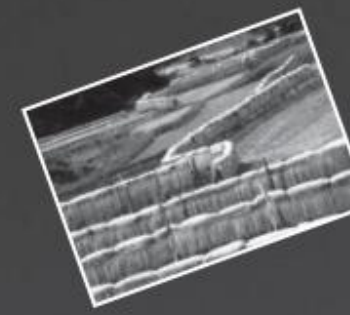


皆さんは、どのようなところに地域の良さ、鮫川村の良さを感じるだろうか。人それぞれに、いろいろな感じ方があるはず。ここでは、鮫川村に特別な思いを持つ方々に話を伺った。そこに、地域を見つめるためのヒントが隠れているかもしれない。

●第2部

地域を見つめる ヒントを探る。



平成23年6月 新たなスタート

いつかは農山村に住みたいという思いを持ち続けていたと話すのは、栗原勇三さん・幸子さん夫妻。現在、東京と鮫川村の二地域居住を実践している。

初めて鮫川村を訪れたのは十五年以上前で、勇三さんは当時、東京都目黒区の職員だった。古殿町の知り合いから「鮫川村はユニークな村づくりをしている」という話を聞き、それから年に数回、鮫川村を訪れ交流を深めていった。「農家の人が野菜などを持ってきてくれて、一緒に鮫川村を訪れた人も

喜んでいました」と、そのときの印象を話してくれた。

そして、二地域居住を始めるきっかけとなったのが、平成二十一年から渡瀬地区で始まった「田んぼのオーナー制度」の受け入れを村から依頼されたことだった。当初は年に三回の活動のたびに、東京から鮫川村を訪れていた。

「田んぼのオーナーをやっているうちに、鮫川村に住んだ方がいいかなと思うようになりました。実際に住んでみると、村の実感が分らないと思っただけです」

そして、平成二十三年六月、念願かなって渡瀬地区に住み始めることになった。空き家を探す際に、「住む

念願かない二地域居住。 四季の移り変わりを 楽しんでいます。

栗原勇三さん・幸子さん くりはら・ゆうぞう/さちこ
渡瀬字中山在住

「一年目は、冬の厳しい寒さなどに戸惑うことも多かったという二人。しかし、今では四季の移り変わりを楽しんでいるという。さらに鮫川村の良さを聞いてみた。

「まず、高齢者が元気。自分のためにも他人のためにもやるのがたくさんあって、六十代はまだまだ若いと感じます。あとは、澄んだ空気と空の青さが都会とは違います」

すべてが新鮮に感じられ、また、地域に見守られていると強く感じるという。

「花がきれいに咲いたねーなど、地域の方々が声をかけてくれます。私たちがいるんだなと思います。それがうっとうしいと思う人もいるかもしれませんが、私たちがいるからうれしいんです。人と人とのつながりに感謝しています」と、二人は顔を見合せながら話してくれた。



家庭菜園で野菜作りを楽しんでいる栗原さん夫妻



「田んぼのオーナー」の皆さんと一緒に

窓から空が見えることに感動

東京都北区で、食を通して健康づくりを目的に活動している健康づくり栄養グループ「食彩」。その代表を務めるのが青田照子さんだ。主に、高齢者の健康づくりや交流機会の提供などを目的とした「高齢者ふれあい食事会」や食への関心と理解を深めるための催しなど、非常に精力的、広域的に活動している。

青田さんが初めて鮫川村を訪れたのは平成二十一年の秋。そのときの印象を、「空気が都会とまったく違おうし、窓から空が見えることに感動しました。鮫川村の自然に触れて活力をもらえました」と話す。また、「村の人たちが丹精込めて育てた作物には、その思いが入っています。これは自然が育んだ安心して食べられるものです。それらが並ぶ『手まめ館』（村直売所）には、東京からでも買いたいと思う物がたくさんあります」と続けた。

素朴な料理が都会の人には魅力的

今年六月、グループの仲間と鮫川村を訪れたという以前の思いが、「農村体験ホテルツアー」という形で実現した。約五十人が参加し、鮫川村の食文化などに触れた。

十二年前から鮫川村と交流があり、現在も年に数回、村内で学生の実習や景観保全活動を行っている、東京農業大学の入江彰昭准教授に話を伺った。

里山の景観が荒れていくことに危機感

初めて鮫川村を訪れたのは平成十二年の冬、「ふるさと体験バスツアー」への参加がきっかけでした。そのときの鮫川村の第一印象は、景観が美しいということ。谷戸に囲まれた中に田んぼが広がっている景色が特徴的で、とても印象に残りました。また、小じゃがのみそ炒めや刺し身こんにやく、かぼちゃなどの郷土料理のおいしさにも魅力を感じました。また、鮫川村が抱えている耕作放棄地の増加などの課題を知り、里山の景観が荒れていくことに危機感を覚え、また学生と来ようということになりました。

そして、リピーターとして訪れるようになったのは、景観や食の魅力以上に、鮫川村の人の魅力がありました。村の職員や「ほっとはうす」のお母さんたち、温かく受け入れてくれた地元の方皆さん。来たときには「よく来たね」。そして、帰るときには「また来てね」と手を振って見送ってくれました。

自分が育てた作物が体と心に栄養を与えていることに誇りを

青田照子さん あおた・てるこ
東京都北区・健康づくり栄養グループ「食彩」代表



農村体験ホテルツアーで鮫川村を訪れ、地粉を使ったうどん打ちを体験した

教育の場としての鮫川村というフィールド

学生にとって鮫川村での活動のような現場体験は、最初の動機づけをさせるための教育として非常に大切だと考えています。

少なからず地域は何らかの課題を抱えています。学生たちには、現場体験をしながら考え、自分なりの課題解決の答えを導き出してほしいと思っています。考えるきっかけを鮫川村というフィールドを通して与えたいのです。さらに、学生自身が自分の地元と鮫川村での経験を結びつけてほしいです。自分のふるさとでもこれらの経験を生かして、自分の答えを見つけてくれればと思います。

キーワードは「里山」。美しい景観は、鮫川村の財産です。

入江彰昭さん いりえ・てるあき
東京農業大学短期大学部環境緑地学科准教授



鮫川村の魅力について話す入江准教授



中央が青田さん。食彩のメンバーと一緒に「鮫川の郷土料理を楽しむ会」に参加し、村の食材をふんだんに使った料理を味わった

また、十一月二十四日に村公民館で開催した「鮫川の郷土料理を楽しむ会」にも参加。ここでは、郷土料理の定番とも言える「きんぴらごぼろ」や「白あえ」がとても新鮮だったと話す。

「素朴な料理に対して、特に魅力を感じました。そう菜商品として販売してもよいと思えるくらいおいしい料理ばかりでした。この味を北区にも伝えたいものです」

村民には日常的なことでも、都会の人たちにとってはとても魅力的なものに映るのだという。

ものを食べていることを当たり前と思わず、そのものによって命が永らえていることに気付いてほしいです。また、自分が育てた作物が体と心に栄養を与えていることに誇りを持つてほしいです」と話してくれた。

このように、鮫川村の食に対して強い関心を寄せている青田さん。農作物のほかにも、村内産大豆で作った豆腐をはじめ魅力的な商品がたくさんあるという。

「これから、鮫川村と北区のパイプ役になって、正しい食を伝え、広めていきたいです」と、最後に力強く話してくれた。



館山公園内のピオトープを整備する東京農大の学生

美しい食・人・景観それが村の財産

鮫川村の美しい景観をさらに磨いていってほしいです。村内では、ゴミ拾いや草刈りなどが行われていますが、このように地域の人が努力することによって地域の美しさは磨かれていきます。「里山」を一つのキーワードとして、美しい村づくりを進めていってほしいです。

人は美しい物にひかれます。人を動かすためには、「美しい食・人・景観」をさらに磨いていくことが必要だと考えます。そうすることで交流人口も増えていくと思います。村の人たちがそれを鮫川村の財産だと理解し、さらに積極的に努力していくことで、美しさが保たれていくのではないのでしょうか。